

## 話しあうためのやさしいおどり

佐藤利香、橋本真那



小さなしぐさから対話をはじめてみる……。

本企画は他者とのコミュニケーションに対するおそれの解消を目的とする。日常対話の中で身体的・精神的に自分の想いを伝えることの難しさを感じている人たちに対し、身体表現というアートを通じて新しい対話の可能性を共有する。具体的には、以下の3つの観点から、ケアとコミュニケーションのあり方を探求するためのアートプロジェクトを行う。

### ①福祉の関係性の拡張

介護における、介護する人／される人という関係性について、介護者は要介護者の生活に大きく介入しているのはもちろんのこと、要介護者から受け取る視点や価値観があるだろう。また介護の関係性を越えた先にも、顔を合わせる人、様子をうかがったり気にしたりする人などがある。自分と他者の立場の相違を確かめる対話は、誰もが福祉の意識を念頭に置くために必要ではないだろうか。

### ②国際交流

共同研究者の橋本はこれまで主に日本と台湾を拠点とし、アートを通じて相互理解を深めることを目指して活動してきた。言葉を用いない身体的コミュニケーションについて国境を乗り越える可能性を幾度も目にし、年代や人種の壁を超えて感動を共有できる手段であると確信している。一方で言葉の壁を目の前に、対話に対するおそれや孤独感を痛感してきた。私たちの身体というアートが、本学の学生と留学生との関わりを今以上に深め、国際交流における対話の新たな可能性を広げていくかもしれない。

### ③地域共生のためのコミュニケーション

明確な福祉の対象に括られずとも、コミュニケーションに難しさを抱えている人は存在する。地域で他者と共生することを困難に感じ、地域住民との交流を閉ざす場合もある。これらの苦しさは、社会的孤立にもつながってくるのではないだろうか。社会で他者と共生するために必要不可欠なコミュニケーションを、少しでも前向きに捉えられるようになればと考える。

心の片隅に転がっている石ころのような想いを見逃してしまわず、その小さな喜びや悲しみを拾うことで少し幸せな気持ちになったり、痛みを癒やしたりできるのではないかと考える。